

# 本棚

宮本百合子

青空文庫



この間うちから引越しさわぎで、あつちの古本の山、こつちの古本のかたまりといじりまわしているうちに、一冊、黒い背布に模造紙の表紙をつけた『女学雑誌』の合本が出て来た。かたい表紙をあけてみると、教育という見出しで遺伝についての記事、胎教についての項目、フレーベル氏及幼稚園というような記事の頁が克明に書きこまれている。

インクで書かれたそれらの字は歳月を経てもう今日ではぼんやりとした茶色に変っている。明治二十五年六月から二十六年三月号までが一冊にされているのだけれど、その頃は極めて新しく清潔なモラルの源であつたこの雑誌を、こんな丁寧に扱って真面目に読んだのは、誰だつたのだろう。

表紙裏の字は、どこやら父の字のように思われる。

やはり、今度ごたごたを片づけている間に四五冊のノートが出て来たが、昔の人は何と字がうまかつたのだろうかとびつくりした。それは化学のノートで、おそらく高校時代の父が筆記したのだろうと思える。試験管を焰の上で熱する図などが活々としたフリーハンドで挿入されていて、計らずも今日秋日のさす埃だらけの廊下の隅でそれを開いて眺めている娘の目には、却つてその絵の描かれている線の生氣に充ちた特徴の方が、文字よりも

親しく晩年の父の姿や動きを髣髴させる。内容としての化学は、かなり初歩が筆記されているらしいのに、それを書いてる字ばかりはいやに大人らしく立派で、そこにもまざまざと明治二十年代の青年の生活がうかがわれる。

父は詩をつくることと篆てんこく刻が少年時代の趣味だったそうで、楠の小引出しにいろいろと彫った臘石があつたのを私も憶えている。その少年が十六のとき初めて英語の本を見て、なかの絵が出て来る迄、さかさに見ていたのが分らなかつたということも聞いている。

明治二十五年の『女学雑誌』と云えば、元年生れであつた父は、二十五歳の青年になつていたわけである。進歩的な気質の青年らしく、父は『女学雑誌』などをも読んでいたのだろうか。二人の妹があつたから、その妹たちに、その雑誌のことを話したり、読ませたりもしただろうか。もし若い父が読んだのなら、表紙裏の抜き書きは、私たちに一層親愛な暖さを感じさせる。そこには、仄かに父が自分の結婚や家庭や子供たちの教育について抱いていた若々しい希望というようなものが語られているから。

だけれども、もしかしたら、これを書いたのは叔父の省吾という人ではなかつたかしら。この人の字癖を知らないけれど、父とは二つか三つ年下の弟で、高校時代にふらりと支那へ行って、そこで一年ほど何かの学校の先生になつていたことがあるというような気質の

人であったそうだ。烈しい一閃な天性で、東大を卒業するという年に、皆の手をふり切つてアメリカへ行つて、やがて宣教師になつてしまった。明治三十九年頃かえつて来て程なく中耳炎でなくなつた。

若い嫂であつた母を相手に、子供のための本を書くことを計画して、その思いつきは折から父が外国へ出かけていて留守中だつた母をかなり熱心に動かしたらしい。耳から頭へ大きく白く繻帯をかけた、どつちかというところわい顔の大柄の叔父の病床のわきで、母は叔父の口述する話を書きとつたりしてもやつたらしい。けれど、この計画は到頭実現しなかつた。それというのは、何しろこの省吾という人は、鱗のない魚はたべないというほどのキリスト信者であつたから、子供のための本にしる、そこに神だとか罪だとか、天国とか地獄とかをぬきにしては物を云うことが出来ない。「神の大いなる日」という本をこの人が書いていて、それにはこまかい銅版刷で世界の終りの日の絵が插画になつてゐるという仕儀である。

母には、天国地獄というものさえ奇怪なのに、まして、叔父の云うことをきけば、親子とさえ、信仰の有無で最後の審判の日には天国と地獄とへ引き分けられなければならぬといふに到つては、逆もそのような信仰をありがたがることは出来ず、ひいては、自分

も手つだつてこしらえる子供の本が、そういう考えで作られてゆくことにも承服しかねたらしい。段々二人の間に議論がおこつて来た。そして、どちらも譲らなかつた。本の計画は中絶したまま省吾叔父は亡くなつた。日本へかえつて亡くなるまでどの位の月日があつたのだろうか。ほんの僅であつたように思う。私が小学一年の頃で、駒本小学という学校の門のところへこの叔父が迎えに来ていてくれたことがある。大きい大きい大人の男が、髪を長くして肩のところ迄下げているというのは、何と珍しく、少し怖しく、それを見てびつくりする友達たちに愧しくきまりわるいような思いのすることだつたらう。

省吾という人がそんなにしてアメリカなんかへ行つてひどいこりかたまりになつてしまつたわけや、日本へかえつて来て、そこで亡くなつた気持には、深い複雑な、そして痛切なものかひそんでいたらしく思われる。若い良人でもある兄も、若く美しい新妻であつた母も、不言の裡に、この熱烈な氣質の弟の決心の動機を理解していたと思える。それが奇矯ではあるが純潔なろうとする意志によつていたり、アメリカほど遠い海を踰えてしまわなければ、そしてやがてはその大きく強い情熱が理が非でも擒にしてしまう神だの地獄だのをつかまえておかなくてはならなかつた内心の苦悩を、父と母とは同情をもつて推察していたと思う。

この叔父が、『女学雑誌』を読まなかったと、どうして云えるだろう。

同じ古本のつみ重りの下から、池辺義象の『仏国風俗問答』明治三十四年版と、明治二十五年発行の森鷗外『美奈和集』、同じ人の三十五年二月発行『審美極致論』が埃にまびれて現れた。「当世書生氣質」を収録した『太陽』増刊号の赤いクロースの厚い菊判も、綴目がきれて混っている。

こんな本はどれもみんな父や母の若かった時分の蔵書の一部なのだが、両親は、生涯本棚らしい本棚というものを持たなかった。その代り、どここの隅にもちよいちよい本を置くところがあつて、どこにでも坐つたところには、手にとってみる本があるという暮しぶりだった。

私の小さかった時には、父のテーブルの置いてある長四畳の片側が二間ぶつとおして下にわかれた棚になっていた。その上の段が即ち本棚で、文芸倶楽部、新小説、太陽などが、何年分もどつさり雑然とカーテンもなくつみ重ねられていた。

五つばかりの娘は手当りばつたりにそれを下して来て、字は読めないから絵ばかりを一心にくつて眺めた。

『新小説』か何かの扉に、一つどう見てもそこに立っているのが何だか分からない妙な絵が

あつた。そこはひろい池で、赤い夕陽がさしている。向うの黒い森も池の水の面も、そこに浮んでいる一つのボートも、気味わるく赤い斜光に照らされて凝つとしてゐる中に、何かが立っている。青白いような顔半分がこつちに見えるのだけれど、そのほかのところは朦朧として、胸のところにかゝつと燃え立つような色のもり上つたものがたぐまつている。五つの娘の瞳にそれはいくらかゴリラの立ち上つたみたいに映るのであつた。その絵ばかりはどう見ても会得しかねた。一度ならずくり返えして見て、わからずしまいであつた。今なおまざまざとのこつているその印象を目の前にくりのべてみると、それはまさしく日本のロマンティック時代の絵画の一葉であつたことがわかる。燃える夕陽と迫る夕闇の池の上で、若い男の顔の半ばが、その胸によりすがつてゐる若い女性の黒髪のかげにかくされていたというわけであつたのだらうと思う。感傷と未熟さの朦朧体にくるまれて、その絵はおませな女の子の眼に、どうしてもわけの分らないゴリラに似た塊りとして映つたのは愛嬌がふかい。

女学校に通うようになってから、私はいつとなし玄関わきの七畳の部屋を自分の部屋にするようになった。省吾叔父がそこに暮していた座敷である。

いろんな目立たない隅々から古い本棚だの古い本だのをもつて来て、下見窓のわきに並

べた。その最初の蒐集の中に、今再び埃の下から現れた赤いクロースの『太陽』だの『美奈和集』だの、もうどこかへ行って跡かたもない黒背皮の『白縫物語』だの『西鶴全集』の端本だのがあった。ポーの小説集二冊を母が何かの拍子で買って来てくれたことから、次第に私の本棚にはワイルドだの、小川未明だの、ダナンツイオだのが加って行った。ワイルド警句集という小型の本も今度出て来た。あけてみると、ところどころに赤鉛筆でマールがつけてある。

それからひとりで武者小路実篤の初期の書いたものだのロシアの作家の作品だのが殖えて来たのを思えば、知らず知らずのうちに明治末期から大正への文芸潮流が、七畳の隅の、粗末な本棚と、まだ半ば眠った女の子の心とを貫いて移ったことが考えられる。

今度の本片づけには、全く歴史のきつい波瀾がさして、私は空襲の場合を屢々思いやった。

震災の時は、災難をのがれた。これらの本たちは、そこにまつわる生活の思い出とともに、これから先は何年、平安にその頁を黄ばませて行けるのだろうか。私には、コンクリートの書庫をつくるという手段もない。どっさりの愛すべく尊敬すべき本たちは、年が新しくなるにつれて豊かな生活の脈搏をつたえつつあるのだが、それらの本を、私はせめて

いくらか火事に遠そうな場所へ置くというだけのことしか出来ない。でも、一抹の楽天的な響が心のどこかにあつて、一つの美しく高い歌のメロディーが甦つて来る。ドン・キホーテが、彼の大切な騎士物語の本たちを焼かれたとき、ドン・キホーテは何と歌つてサンチヨを慰めてやつたろう。「サンチヨよ、泣くな、私の本は失われても、私の生活の物語は失われることはないだろう。」

現代の歴史では、ドン・キホーテが単数で語つたところが複数で、人間が現実を生きつづける力として、私たちに脈々と聴えて来ると感じられる。

〔一九四一年十月〕

# 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七巻」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「書齋」

1941（昭和16）年10月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 本棚

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>